

千葉県生物多様性ハンドブック1

千葉県の生物多様性を守るために

第2版



千葉県生物多様性センター・千葉県立中央博物館（編）

はじめに

私たちは、毎日、米や野菜、肉や魚を食べています。また、日々の暮らしの中で、鳥や虫やカエルの声を聴き、季節を感じています。森や海を眺めては、大自然の営みに心を癒やされています。これらは、地球で育まれた豊かな生物多様性からの恵みによるものです。生物多様性は私たちの生存の基盤と言えるでしょう。

こうした生物多様性が、開発や外来生物の影響、生活様式の変化、地球温暖化の影響などによって、日本をはじめとする世界各地で危機的な状況にあることが認識され、1992年のブラジルで開かれた地球サミットでは「生物多様性条約」が採択されました。

しかし、生物多様性がどのようなもので、どのようなことが問題となっていて、私たちがどのように行動すればいいのかわかりにくく、なかなかわかりにくいところがあります。私たちの食卓や身のまわりには、世界各地から経済活動によって運ばれてきたいろいろな物が並んでいます。このように、現代の私たちの生活が、世界中の生物多様性と複雑なかかわりを持っていることも、わかりにくさの一因です。

そこで、わかりやすく、しかも広範に及ぶ生物多様性にかかわる問題の全体像を理解でき、そして様々な立場の読者が、生物多様性を自分の問題として取り組み、その第一歩を踏み出す助けとなるよう、本シリーズを企画しました。

本書は、シリーズの第1弾として、千葉県立中央博物館の2009年夏の企画展「生物多様性1：生命の^{いのち}にぎわいとつながり『虫、魚、鳥、草、木、…人』その素晴らしさを、親から子へ、そして孫へ」にあわせて、その内容も含めて作成しました。生物多様性の基本概念の説明から、千葉県の自然環境や生物多様性、そして私たちの暮らしとのかかわりを地域別に解説しました。そして、生物多様性の保全のために、私たち一人ひとりがどのようなことができるのかを示し、また具体的な活動事例を掲載しました。

本書が、生物多様性の入門書として活用され、多くの人々の第一歩につながれば幸いです。

もくじ

第1章	生物多様性とは？	2
	生命の誕生・進化と地球環境の形成	2
	生物多様性の価値と利用	3
第2章	千葉県の生物多様性と私たちの暮らし	6
	北総台地の里山	8
	東京湾の干潟	10
	印旛沼・手賀沼周辺	12
	九十九里の湿地と砂浜	14
	房総の岩礁海岸	16
	房総丘陵の里山	18
第3章	身近な生物多様性を守るために	20
	私たちの生活と自然との関係	20
	生物多様性条約とMAの提言	20
	生物多様性ちば県戦略	21
	地球温暖化と生物多様性の関係	22
	絶滅危惧種の保全	23
	外来生物の影響	24
	身近な自然の調べ方	25
	身近な自然の守り方	27
第4章	生物多様性の保全活動紹介	29
	谷田・武西の里山	29
	印旛沼	29
	県立船橋芝山高等学校	30
	三番瀬	30
	長柄町立水上小学校	31
	九十九里浜	31
	夷隅川	32
	大山千枚田	32

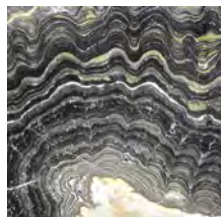
第1章 生物多様性とは？

生命の誕生・進化と地球環境の形成

地球ができたのは約46億年前と推定されています。やがてメタンやアンモニアをもとに、原始の海にアミノ酸がつくられ、約38億年前、生命が誕生しました。原始の海で誕生した最初の生命は、やがてバクテリアなどの単細胞から多細胞へと進化していきました。

その中には、二酸化炭素と水から有機物をつくり、さらに酸素をつくり出す光合成生物のラン藻（ストロマトライト）がいました。酸素の増加はやがて、大気のオゾン層の形成につながり、地上に降り注いでいた生物に有害な紫外線を減少させました。これにより、陸上生物が繁栄していきました。

このように現在の大气や海などの地球環境は、長い時間と多くの生命活動によってもたらされたもので、私たち人間（ヒト）もその環境の中で初めて誕生し、繁栄できた生物多様性の一員なのです。



ラン藻が層状になったストロマトライトの化石の断面



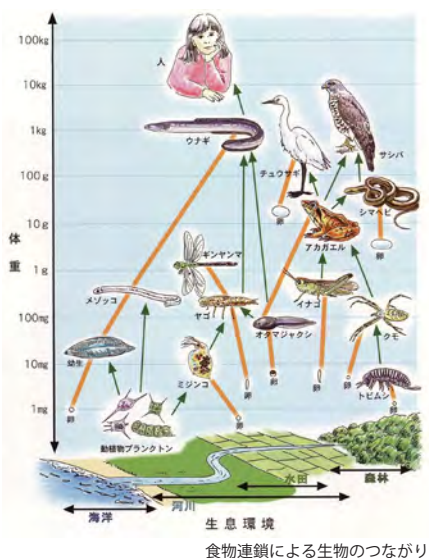
生命の誕生・進化と地球環境の変遷

生物多様性の価値と利用

■ 生物多様性とは ■

多様性とは、モノやコトの状態を示す言葉です。ある空間に、より様々なモノやコトがあるほど多様性が高いわけです。生物については、種の多様性だけでなく、同じ種の中にも遺伝的な多様性があります。また、環境の違いに応じてできる群集・群落も多様です。

生物多様性 (biodiversity; biological diversity) とは、このように遺伝子レベルから種のレベル、さらには生態系のレベルに至る生命の変異・変化とその関係の総体であり、「^{いのち}生命のにぎわいとつながり」と言えます。



食物連鎖による生物のつながり

■ 遺伝子レベルの多様性 ■

遺伝子とは、生物の形態や機能を発現するための情報となる物質で、細胞の中にあるDNA（デオキシリボ核酸）にあるアデニン、グアニン、チミン、シトシンの塩基対の並び（塩基配列）で表されます。小さなバクテリアのマイコプラズマでも約58万の塩基対があり、500個ほどの遺伝子を持っています。またヒトの塩基は約30億対、遺伝子は約2万3千個です。

遺伝子の多様性は、生物の形質の多様性、すなわち様々な細胞の形や機能から、個体の変異や種の違いをもたらします。遺伝子は基本的に親から子へ伝えられますが、突然にDNAが変化してしまうことがあり、それは遺伝子の変化をもたらします。



県内産ナメントウの斑紋にみられる遺伝的多型
(千葉県立中央博物館収蔵標本)

■ 種レベルの多様性 ■

種とは、形質が類似し、互いに交配できる生物個体の集まりです。地球上にはバクテリアなどの原核生物から、単細胞の原生生物、そして菌類や植物、さらに動物のゾウやクジラまで、これまで160万種以上の生物が記録されています。しかし、まだ知られていない生物も多く、総数は500万から3000万種と推測されます。もちろん私たち人間(ヒト)もホモ・サピエンスという一つの種です。

何らかの要因によって、染色体や遺伝子に変化が生じたとき、突然変異の個体が現われることがあります。突然変異の個体は淘汰され消えていくものがほとんどですが、あるものは生き残り、長い年月の末に新しい種が形成されていきます。

表 生物の種の数

	世界*	日本	千葉県
動物			
哺乳類	5,488	172	68
鳥類	9,990	540	400
爬虫類	8,734	100	15
両生類	6,347	42	13
魚類	30,700	3,800	400
昆虫類	950,000	30,000	5,000
軟体類	81,000	8,000	2,000
甲殻類	40,000	6,000	900
珊瑚類	2,175	1,150	100
クモ類	98,000	3,600	700
その他	61,209	-	-
小計	1,293,643	53,404	9,596
植物・菌類など			
裸子植物	980	46	10
被子植物双子葉	199,350	3,200	930
被子植物単子葉	59,300	1,400	470
シダ植物	12,838	770	190
コケ植物	16,000	1,670	400
緑藻類	1,600	230	80
紅藻類	4,100	860	330
褐藻類	900	310	120
地衣類	17,000	1,600	250
キノコ類	30,000	3,000	700
小計	342,068	13,086	3,480
合計	1,635,711	66,490	13,076

(※ IUCN, 2008 などによる)

■ 生態系レベルの多様性 ■

生物は、深海から海岸、そして高山や砂漠、さらには極地まで多様な環境に適応してくらしています。それぞれの環境では、様々な種がその土地の環境や、生物同士で互いに関係し合い、その結果、環境と生物が一体となった生態系を形成します。このため環境の違いによって、多様な生態系がみられます。

同じ場所でも、その環境の変化に応じて様々な生物の侵入と衰退がみられます。したがって生態系も時間とともに変化し、各地の歴史に応じた様々な生態系が存在することになります。

生態系では時として新たな種が侵入して来たり、大きな環境変動によって多くの種が絶滅の危機に瀕したりします。そのような時、その生態系の生物多様性が高いと、外圧からの抵抗力や回復力が高くなります。したがって、環境や生物多様性の状況に応じて、安定性の高い生態系から、安定性の低い脆弱な生態系まで多様なものがあります。

■ 生物多様性の価値と利用 ■

現在の私たちが依存している石油などの化石エネルギーは限りある資源ですが、生物多様性によってもたらされる様々な恵みは、その活用方法によっては再生可能で、持続的に利用することができます。また、生物多様性の利活用は、持続的な社会にとって欠かすことができないものです。

資源（食料、燃料、生活用品、農林水産物など）

人間が生きていくために必要な食料は基本的に他の生物の体であり、人間にとっての豊かな食料とは、豊かな生物多様性そのものです。伝統的な農業では、農地環境の違いや年々の気候変動に備え、多様な作物や品種から地域に適したもの（在来品種）を選び出し、安定した収穫をはかってきました。

環境（大気、水、土壌、地形の安定など）

植物は酸素をつくるとともに、温室効果ガスの二酸化炭素を吸収し、森林は水源を涵養し、土壌を肥やし、気候や地形を安定させます。このように生物多様性は、物質やエネルギーが循環する生態系を形づくることで、人間の生活基盤となる多様で、安定した環境をもたらします。

精神（感性、安らぎ、信仰、教育、文化芸能など）

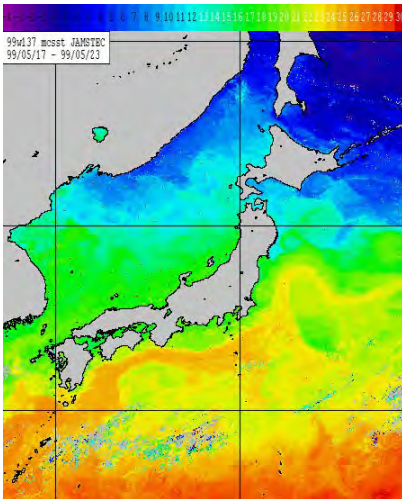
生物界の一員である人間は、五感で環境を知り、他の生物とのかかわりを通じて精神の安定と健全育成がはかられてきました。古く私たちは自然物に八百萬の神が宿やおよぼすっていると信じることで、身のまわりの自然との深いかかわりを意識し、文化芸能や芸術が発展してきました。

指標（生物指標、環境モニタリングなど）

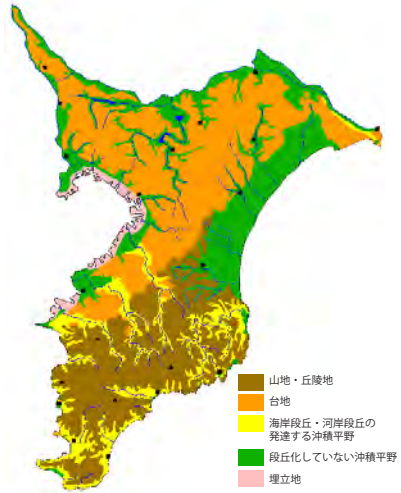
様々な生物のすがたや状態はときに環境の指標となります。野生の生物は人間以上に敏感に環境変化をキャッチし、情報を提供してくれるので、環境モニタリングのためには必要不可欠です。

第2章 千葉県生物多样性と私たちの暮らし

千葉県は日本列島のほぼ中央に位置し、暖温帯の温暖で湿潤な気候の下、スダジイやカシ類などの常緑広葉樹林と、コナラ、クヌギ、イヌシデなどの落葉広葉樹林が広がっています。県内の最高峰は標高 408m の愛宕山で、高い山こそありませんが、県南部には起伏に富んだ房総丘陵が広がっています。県北部では、細い谷が樹枝状に入り組んだ北総台地を、九十九里平野と東京湾岸の平野が挟むように位置しています。



日本近海の 1999 年 5 月 17 日～5 月 23 日までの海面水温分布。資料提供：JAMSTEC 一部改変。

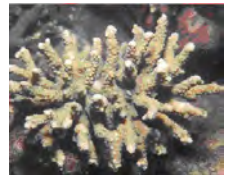


千葉県の地形

千葉県沖の太平洋は、暖流の黒潮と寒流の親潮とが出会う場所となっており、利根川や栗山川、夷隅川では北方系の回遊魚であるサケが遡上する一方、館山湾では亜熱帯性の造礁サンゴが見られます。また、東京湾の干潟や南房総の岩礁海岸、九十九里の砂浜など、地域ごとに海岸環境が異なります。さらに県北部には大きな河川や湖沼があり、九十九里平野には湿地が点在するなど、多様な淡水環境も見られます。



栗山川のサケ



館山湾のエダミドリイシ (サンゴ)

縄文時代の貝塚が北総地域を中心に高密度で分布していることからわかるように、豊かな自然を利用して、古くから人々の生活が営まれてきました。現在、台地や緩やかな丘陵地には、田畑や雑木林、スギの植林など多様な環境がモザイク



モザイク状の里山環境（画：浅井象男）

ク状に配置された里山の景観が広がっています。人々は里山の自然に手を加え、管理をすることで、日々の暮らしに必要な食料や水、燃料、木材などの資源を持続的に利用していく生活をおくっていました。こうした里山の水田や雑木林では、多様な生物もみられます。

一方、海岸付近では、魚介類の採集がなりわいの集落、あるいは採集と農耕の両方を営む集落が見られます。こうした地域は里海と呼ばれ、豊かな海からの恵みを受けて人々の暮らしが営まれていました。



岩礁でのヒジキ採り（南房総市千倉）

北総台地の里山

県北部に広がる北総台地は、平坦な台地に、平らな谷底を持つ「谷津」と呼ばれる細い谷が樹木の枝の様に入りこんでいるのが特徴です。

この谷津の周辺では昔から人々の生活が営まれてきました。谷津の谷底では約 2000 年も前から水田（谷津田）が拓かれ、稲が栽培されてきました。台地上は、マツやスギの植林、畑のほか、茅場（ススキなどの草地）などにも利用され、江戸時代には柏や佐倉周辺に幕府の牧場がつけられていました。



北総台地の谷津田

■ 生物の多様性 ■

谷津には、稲作に伴って、水田や畦、水路、池など多様な環境が生み出され、これらの環境に適応した多くの生物がみられます。ニホンアカガエルやトウキョウダルマガエルは水田を利用し、畦にはオオジシバリやミゾカクシが花を咲かせ、水路ではメダカが泳ぎまわっています。さらに、カエルを食べるヤマカガシなどのヘビや、ヘビを食べる猛きん類のサシバなど、多様な生物がくらしています。



ニホンアカガエル



カタクリ

一方、台地上はコナラなどの落葉樹からなる雑木林や茅場、畑、スギやマツの植林として利用されてきました。管理された明るい雑木林の中では、カタクリやヒトリシズカなどが花を咲かせ、定期的に草刈りされる茅場では、キキョウやワレモコウなどの草原性植物が見られました。

このように、谷津の自然に人間の営みが加わることで、多様な環境が生み出され、そこに多様な生物がくらしていました。

■ 人々の暮らし ■

戦後間もない頃まで、雑木林では、田畑の肥料となる堆肥づくりのために落葉樹の落ち葉を集めたり、炭の原木としてクヌギなどを伐採していました。茅場は屋根を葺くためのススキを集めるために使われていました。このように、人の暮らしにとって、里山の自然と生物は欠かせない資源でした。

北総台地は、夏の水不足や冬の強風と厳しい環境でしたが、畑の北側にマツやスギの防風林をつくったり、畑の周囲などに茶並木を植えたり、また深い井戸を掘るなど、そこでの生活には様々な工夫がこらされてきました。農業においても、麦やサツマイモ、また落花生などの干ばつに強い作物が栽培されてきました。



小麦

■ 生物多様性の危機と暮らしの変化 ■

かつて薪や炭に頼っていたエネルギーは石油や石炭に、また堆肥は化学肥料にかわるなど、私たちの暮らしは大きく変化しました。雑木林や茅場では管理が行われなくなり、常緑樹が生い茂り、林の中も暗くなってしまいました。その結果、明るい雑木林や茅場にくらしてきた生物は



耕作放棄地

生活の場を失い、農薬や化学肥料の使用、乾田化など、農業の変化も生物には大きな影響を与えています。さらに、都市化によって、水田や森林が宅地やゴルフ場、工場などに変わり、多くの生物種が絶滅の危機に瀕しています。

東京湾の干潟

東京湾は日本有数の浅い内湾です。江戸川や養老川などの河川が上流から運んだ砂や泥が堆積して多くの干潟がつくられています。干潟では十分な酸素の供給があり、栄養塩類も豊富に流れ込み、多くの生物がくらしています。

江戸時代には、船橋周辺の海（三番瀬含む）は「御菜浦（おさいうら）」と呼ばれ、将軍家に魚介類を献上していました。明治時代になると、海苔の養殖が本格的に始まり、重要な産業の一つとなりました。



東京湾の三番瀬

■ 生物の多様性 ■

干潟は潮の干満に伴う環境の変化が大きい場所です。潮が引いた時、水面から出て干上がる部分を潮間帯と呼びます。その上部は乾燥しやすい環境となり、下部は海に沈んでいる時間が長くなります。沖には、常に海面下にある浅海域が広がっており、このような岸から沖への多様な環境を利用して、様々な生物がくらしています。

干潟の潮間帯上部ではホソウミニナやコメツキガニなどが、潮間帯下部ではアサリやバカガイ、ユビナガホンヤドカリなどがすんでいます。また浅海域では、ツメタガイやカレイ類など大型の生物が生息しています。浅海域の一部ではアマモ場もみられ、そこは様々な生物が産卵の場として利用するほか、稚魚の隠れ場にもなっています。これらの生物たちはシギ・チドリ類やカモ類などの水鳥にとって重要な餌にもなっています。こうした干潟の生物は、海水中や砂泥に溜まった有機物などを食べ、海の汚れを浄化する役割もしています。



アサリ



干潟にやってくるシギ類

■ 人々の暮らし ■

浦安などで行われていたアサリやハマグリ漁、江戸時代から行われてきた海苔の養殖などは、全国有数の生産量を誇っていました。特に、冬から春にかけて盛んに行なわれた海苔の養殖は、貴重な現金収入源でした。

干潟は漁業だけでなく、春は潮干狩りや、すだて遊び、夏は海水浴や釣り人と人々に親しまれた場所でもありました。現在でも、三番瀬などでは潮干狩りや干潟の自然に親しむ人々にでにぎわいます。



ノリ養殖（木更津市金田）

■ 生物多様性の危機と暮らしの変化 ■

東京湾では江戸時代から埋め立てが進んでいましたが、千葉県では特に戦後になってから工場建設や住宅開発を目的に、多くの干潟が埋め立てられました。また、工場や家庭からの排水による水質の悪化などによって、漁業をやめる人も増えました。埋め立てられた海岸は垂直護岸が多く、私たちが海と親しめる場所も減ってしまいました。近年、水質は改善されつつありますが、現在も赤潮や青潮、外来生物の増加などの問題が生じており、今でも干潟の生物たちにとって安全な生息場所とは言えない状態です。



東京湾の埋立地

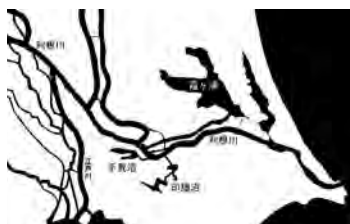
印旛沼・手賀沼周辺

千葉県 대표적인湖沼である印旛沼と手賀沼は、ともに利根川に近い県北部に位置し、昔は「香取の海」と呼ばれる大きな湖の一部でした。江戸時代に利根川の流れが東京湾から銚子方面へ替わると、土砂が湖に大量に流入するようになり、堆積した土砂で湖の一部が隔離されて沼になりました。

沼の周辺は低湿地が広がっていましたが、少しずつ水田化され、米づくりと沼の恵みをもとに多くの人々が暮らすようになりました。



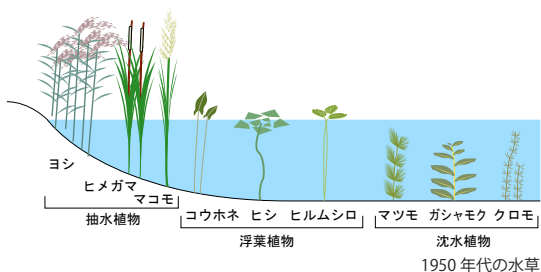
約 1000 年前の千葉県北部



現在の千葉県北部

■ 生物の多様性 ■

これらの沼は水草の宝庫で、多様な植物が、水深などの環境に合わせてすみ分け、印旛沼では 40 種類を超える水草が生育していました。岸辺の浅い場所ではヨシなどが茂り、水深 1～1.6m 程度の場所



所ではマコモやヒメガマのほか、葉を水面に浮かべたコウホネやヒシなどが生育していました。さらに深い場所ではマツモやガシャモクなど植物全体が水中にある沈水植物もみられました。

これらの水草は様々な種類の魚の隠れ場や産卵場所となり、コイやフナ、モツゴなどの魚も数多く生息していました。また、水草はキンクロハジロやホシハジロなど潜水性の水鳥の餌となり、水草が育てた魚はミコアイサなど魚食性水鳥の餌となったため、手賀沼では大正時代には 50 万羽を超える膨大な数の水鳥が見られました。

■ 人々の暮らし ■

周辺住民は、沼の豊かな生物を生活の糧^{かて}として利用してきました。コイ、フナ、ウナギ、ナマズ、シジミ、エビ類、ドジョウのほか、ガン・カモ類などの水鳥も多くとれました。また、豊富な沈水植物を集めて田畑の肥料として使う「モク採り」が行われていました。



香取市磯山の水塚

沼周辺の低地では、人々は昔から水害を防ぐために対策をとってきました。家は少し高い自然堤防の上に建て、さらに庭に一段高く盛り土をして、周囲を石でかためた水塚（みづか）といわれる小屋を建てました。そこには、米、麦、味噌、醤油などを収納するほか、洪水のときには避難場所となり、軒先には小舟もつるされていました。

■ 生物多様性の危機と暮らしの変化 ■

戦後の干拓事業は沼面を縮小させるとともに護岸工事がなされ、水辺環境が狭められました。沼周辺の市街化は、流入する汚濁物質を増加させ、富栄養化した沼ではアオコが発生するようになりました。水質汚濁によりカラスガイやマシジミなどの貝類が激減したほか、沈水植物などの多くの水草が姿を消しました。貝類の減少は貝に産卵するタナゴ類にも大きな影響を及ぼしました。



チャンネルキャットフィッシュ

こうした自然の変化と並行して、漁業やモク採りといった沼の生物にかかわる暮らしも廃れていきました。近年では、ナガエツルノゲイトウやオオクチバス（ブラックバス）、チャンネルキャットフィッシュなどの外来種が定着・増加し、在来種の生存をおびやかしています。

九十九里の湿地と砂浜

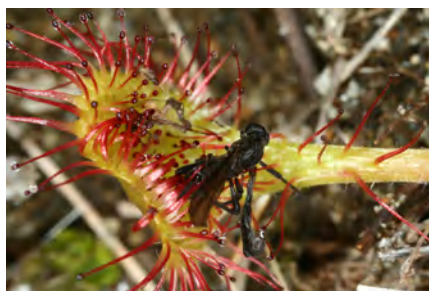
九十九里平野は、幅7～11km、長さ南北60kmに及ぶ日本有数の海岸平野です。この平野には池や湿地が多く、一部は水田としても利用されてきました。

九十九里海岸では、昔からイワシ漁が盛んで、江戸時代、農作物の肥料となるしめ粕や干鰯ほしかがたくさん作られました。



九十九里浜

■ 生物の多様性 ■



モウセンゴケ

九十九里平野の池や湿地は、栄養分の少ないやせた土地だったため、「成東・東金食虫植物群落」に見られるようにモウセンゴケやミミカキグサなどの貧栄養地に特有な食虫植物をはじめ、背丈の低い湿地植物の宝庫でした。

九十九里の砂浜は、アカウミガメが毎年産卵にくる場所の北限として知られるほか、砂浜ではミユビシギなどシギ・チドリ類が餌を探し、沖ではイワシ類やアジが回遊し、時にスナメリの群れも見られます。



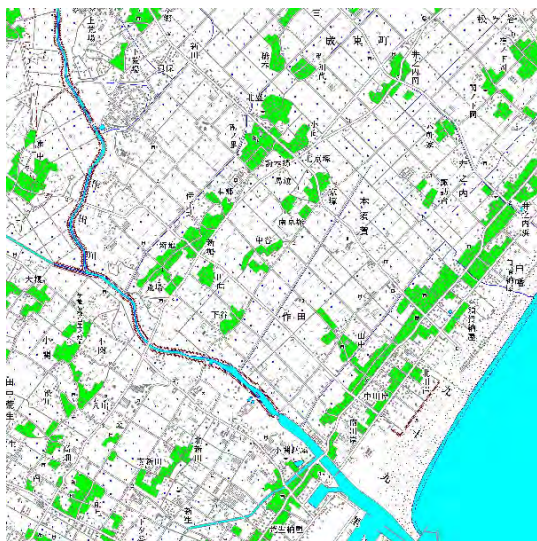
アカウミガメ



ゴカイを食べるメダイチドリ
(写真：池田文隆)

■ 人々の暮らし ■

九十九里平野では、イワシ漁が盛んになるのに伴い、人口が増加し、「納屋集落」、「岡集落」、「新田集落」などの集落ができました。「納屋」とはイワシ漁に必要な用具をしまっていた場所、「岡」は昔から人々が住んでいた場所、「新田」はイワシ漁が不漁の時に農業をしていた場所です。「納屋」は比較的海岸付近に、「岡」、「新田」は内陸の平野部に多くみられます。このように人々は漁業とのかかわりの中で、土地利用をはかってきました。しかし、漁師人口は減少傾向にあり、かつてのイワシ漁が盛んだった頃の人々の生活は見られなくなりました。



(国土地理院の数値地図 25000 地図画像「上総片貝」を掲載)

■ 生物多様性の危機と暮らしの変化 ■

九十九里平野では、排水路の整備や宅地開発が進む中で、池や湿地は急激に減少し、残った湿地も乾燥化し、湿地の植物は姿を消していきました。屏風ヶ浦や太東崎の護岸化により、九十九里浜に砂が供給されなくなって砂浜がやせてきています。また、砂浜への車の乗り入れやごみの増加で、砂浜にすむ生物のくらしがおびやかされています。



海浜植物群落の中にできた車のわだち

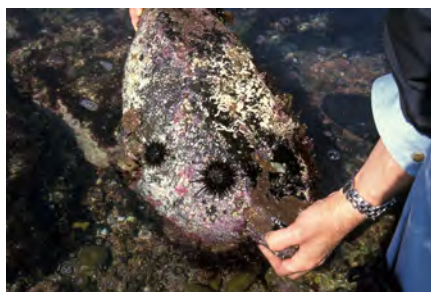
房総の岩礁海岸

房総半島南部では、堆積岩が露出した岩礁海岸が広がっています。江戸時代には、紀州（和歌山県）から多くの漁民が主にイワシ漁を目的に千葉に来て、そのまま定住しました。そのため、「白浜」・「勝浦」など、和歌山県内にある地名が千葉県内にもあります。



房総の岩礁

■ 生物の多様性 ■



ムラサキウニ

この環境を利用して、様々な生物がくらしています。特に潮が引いたときに現れる潮だまりには、ヤドカリ類やウニ類などとともに、色鮮やかなアメフラシや、スズメダイの幼魚など、様々な小さな生物が見られます。

沖の海底では、アラメやカジメなどの大型海藻類が海中林を作り、アワビ類やサザエ、イセエビなどが生息しています。

海岸の磯にはごつごつした岩や石があり、生物が隠れられる隙間や潮だまりがたくさんあります。そこに潮の干満が重なり、多様な環境が生まれます。



カジメ海中林



ソラスズメ

■ 人々の暮らし ■

岩礁海岸では、「あま」（男は「海士」、女は「海女」）と呼ばれる人達によって、潜水漁業が行なわれています。海底までもぐり、アワビ、サザエ、テングサなどを採っています。

また、かつては主にはツチクジラを対象としたクジラ漁が盛んでした。紀州漁民によって広められたと考えられており、皮下脂肪は灯火用燃料や害虫駆除用の鯨油（げいゆ）に使われ、肉は地元で貴重なタンパク源として消費されました。

しかし、最近は過疎化が進み、漁師の数が減少、「あま」の高齢化も進んでいます。また牛や豚、鶏肉の普及や、クジラの国際的な保護規制もあり、クジラを食べる習慣も少なくなりました。



鴨川市江見の海士（写真：末永望）



スーパーで販売されているクジラ肉

■ 生物多様性の危機と暮らしの変化 ■

房総の磯は、これまで大きな開発はあまり見られず、比較的良好な環境が保たれてきました。しかし、最近、道路・港湾の建設やレジャー客による磯への立ち入りなどによって、岩礁の生物多様性がおびやかされています。

房総丘陵の里山

房総半島南部の地域は房総丘陵と呼ばれ、標高は低いものの起伏に富んだ地形と深い森に覆われています。清澄山などでは、温暖多雨な気候により、アカガシやスダジイなどの常緑広葉樹の森が広がっています。



房総丘陵の里山

■ 生物の多様性 ■

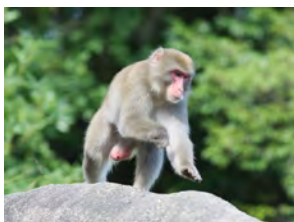
房総丘陵では、スダジイやカシ類にタイミンタチバナ、コショウノキ、バリバリノキといった南方系の樹木が混じった森がみられます。また、尾根にはヒメコマツやヒカゲツツジ、谷にはフサザクラなど、氷河期の生き残りと考えられる北方系の植物が森をつくっています。こうした森林を利用して、ニホンジカやニホンザルは数千頭以上が生息しています。他にもヤマセミやモリアオガエル、ヒメハルゼミなど、県内では房総丘陵にしか生息しない動物もたくさんいます。



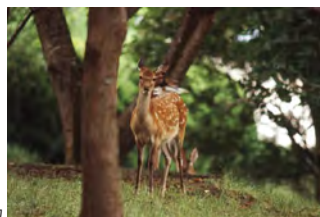
コショウノキ



モリアオガエル



ニホンザル
(写真：池田文隆)



ニホンジカ

■ 人々の暮らし ■

かつての人々は自給自足に近い生活を営んでいました。棚田で稲作をし、畑でそば、大豆などを栽培してきました。また、山菜や野鳥、ノウサギを採り、炭や薪、戸や障子、白などを作る木材加工は貴重な現金収入源となっていました。このような山の自然と密接なかかわりを持つ人々にとって、山は信仰の対象でもありました。例えば、房総丘陵各地では「山の神の日」という行事があります。その日は山の神を祭り、一日山仕事を休みます。しかし、エネルギー源が石油などの化石燃料にかわり、また輸入木材が大量に出回るようになり、山とのかかわりも薄れつつあります。



山の神へのお供え
(山の神講、2月8日、君津市清和)

■ 生物多様性の危機と暮らしの変化 ■

現在は若い人達を中心に、仕事を求めて人口が都市へ流出し、高齢化が進み、その結果、耕作放棄や森林管理の放棄も進みました。シカやサルなどの野生生物が人間の生活空間に入り、農作物被害を生じさせています。また、一方ではゴルフ場開発や山砂利採取などによる森林の破壊が進んでいます。

近年では、ヒメコマツの集団枯死や、千葉県で確認されていなかった南方系のランが見つかるなど、異常気象や温暖化が要因のひとつとして検討されるような変化が見られるようになりました。



イネの刈り取り後の田んぼにでてきたニホンザル